

あの名作が舞台化

アラン・メンケン

人気アニメ映画「リトル・マーメイド」が舞台化された。「劇団四季とティズニー」のコラボレーション第四弾だ。

地上の世界に憧れる人魚姫アリエルが、人間の王子エリックに恋をする。アニメのストーリーラインを踏まえつつ、脚本や演出を舞台用にアレンジ。映画版から音楽を担当しているのは、作曲家のアラン・メンケンさんだ。

「先に上演していたブロードウェイ版やヨーロッパ版ももちろん素晴らしいのですが、日本での上演ではさらなる演出を加えたので、より深みが出たと思います」

映画版ではアカデミー賞作



曲賞/主題歌賞を受賞しているメンケンさん、ミュージカル化にあたっては新しいナンバーを十曲追加した。

「アニメは子供向けに作られているものですが、舞台は幅広い年齢の方に見ていただきたい。映画の魅力は損なわずにどのように大人向けにしていくかが課題でした。今回は、アリエルと父のトリトン王の関係というのが大きなテーマの一つになっています。私も娘を持つ父親なので、「パパのかわいいうる天使」という曲などは、イメージしやすかったですね」

豪華陣揃な舞台を、作曲界の巨匠はどのように見たのか。

「四季はプロ意識が高く、質の維持された劇団だと思います。ステージ上での中の水の中表現もとてもうまく、演出が素晴らしい。ショーとしての物語、音楽、演出、すべてを楽しんでいただきたいと思います」

〔四手劇場「夏」でロングラン公演中〕

モネと二人展

平松礼二



「印象派の本拠地ともいえるノルマンディーで、モネと二人展」ができるなんて思ってもいませんでした」

そう喜びを表すのは、日本画家の平松礼二さん(71)。フランスで開催中の「ノルマンディー印象派フェスティバル2013」のメイン企画の一つとして、「平松礼二ー睡蓮の池ーモネへのオマージュ」と題した展覧会が開かれる(七月二十日~十月五日)。

「会場となる印象派美術館があるジヴェルニーは、モネが後半生を過ごしたアトリエがある場所。手作りの庭には池があり、そこでモネはいくつもの『睡蓮』を描いたのです」

五十歳まで印象派に関心がなかった平松さんは、パリで「睡蓮」を見て衝撃を受ける。

「西洋絵画とは異なる東洋的な何かを感じました。それ

から浮世絵などが強く影響を与えたジャポニスムについて調べました。彼らが日本画をどう咀嚼したのか、画家として依然興味を湧き、日本画の手法で彼らの作品を再現してみたいのです」

ジヴェルニーを始めノルマンディーを隔々まで歩き、描いた作品が美術館の目に留まり、今回の展覧会となった。「パリから車で一時間。この旅行のついでにぜひ足を伸ばしていただきたいですね」

〔問い合わせ S&D ☎03-599212002〕

中国最貧地域の実情

ワン・ピン(王兵)

標高三千mの山村。十歳の英美を長姉に、粗末な家に三人だけで暮らす姉妹。母は家出、父は町へ脱走しに行っているのだ。この地で獲れる唯一の作物ジャガイモを得るため、長女は幼い妹の面倒を見ながら家畜の世話をし、畑仕事に明け暮れる。ドキュメンタリー作家ワン・ピンの最新作『三姉妹・雲南の子』は、中国最貧と言われる雲南省の過

酷な暮らしを描き、昨年のベネチア映画祭オリゾンティ部門でグランプリを獲得した。「この地域を描いた文学作品や映像作品は中国にもほぼありません。亜熱帯の美しい自然が広がるなかに少数民族が暮らしていて、たくさんのお荷物がある。日本の方が抱くようなイメージしなく、以前は私もありませんでした。死んだ友人の墓参りで、二〇〇九年に初めてこの村を訪れた時に、家の前で泥遊びをする三姉妹の姿が目に入って話しかけたのが、作品のはじまりです。彼女らは人懐っこく応じて、家を見せてくれた。家の中は水浸しでも汚れかけていたが、作品のものは何ひとつありませんでした」

舞台の洗車場村は全八十戸。省は貧困解決のため全村移住を決めたが、いつかここへ移住するかは村民に知らされ移住しない。(三姉妹・雲南の子)5月25日よりシアターイメージフォーラムにて公開

